

# 闇の絵巻

梶井基次郎

青空文庫



最近東京を騒がした有名な強盗が捕<sup>つか</sup>まって語つたところによると、彼は何も見えない闇の中でも、一本の棒さえあれば何里でも走ることができるといふ。その棒を身体の前へ突き出し突き出して、畑でもなんでも盲滅<sup>めくらめつぼう</sup>法に走るのだそうである。

私はこの記事を新聞で読んだとき、そぞろに爽快<sup>そうかい</sup>な戦慄<sup>せんりつ</sup>を禁<sup>やみ</sup>じることができなかつた。

闇！ そのなかではわれわれは何を見ることができない。より深い暗黒が、いつも絶えない波動で刻々と周囲に迫つて来る。こんななかでは思考することさえできない。何が在<sup>あ</sup>るかわからないところへ、どうして踏み込んでゆくことができよう。勿論われわ

れは摺足すりでもして進むほかはないだろう。しかしそれは苦渋や不安や恐怖の感情で一ぱいになった一歩だ。その一歩を敢然と踏み出すためには、われわれは悪魔を呼ばなければならないだろう。はだし あざみ裸足で薊を踏んづける！ その絶望への情熱がなくてはならないのである。

闇のなかでは、しかし、もしわれわれがそうした意志を捨ててしまうなら、なんとという深い安堵あんどがわれわれを包んでくれるだろう。この感情を思い浮かべるためには、われわれが都会で経験する停電を思い出してみればいい。停電して部屋が真暗になってしまふと、われわれは最初なんともいえない不快な気持になる。しかしちよつと気を変えて吞氣のんきでいてやれと思うと同時に、その暗

闇は電燈の下では味わうことのできない爽やかな安息に変化してしまう。

深い闇のなかで味わうこの安息はいつたいなにを意味しているのだろう。今は誰の眼からも隠れてしまった——今は巨大な闇といちによ一如いになつてしまった——それがこの感情なのだろうか。

私はながい間ある山間の療養地に暮らしていた。私はそこで闇を愛することを覚えた。昼間は金毛の兎が遊んでいるように見えるたに谿向かれかやこの枯萱山が、夜になると黒ぐろとした畏怖いふに変わった。昼間気のつかなくつた樹木が異形いぎような姿を空に現わした。夜の外出には提灯ちようちんを持ってゆかなければならない。月夜というものいは提灯の要らない夜ということの意味するのだ。——こうし

た発見は都会から不意に山間へ行つたものの闇を知る第一階かいてい梯いである。

私は好んで闇のなかへ出かけた。溪ぎわの大きな椎しいの木の下に立つて遠い街道の孤独の電燈を眺めた。深い闇のなかから遠い小さな光を跳めるほど感傷的なものはないだろう。私はその光がはるばるやって来て、闇のなかの私の着物をほのかに染めているのを知った。またあるところでは溪の闇へ向かつて一心に石を投げた。闇のなかには一本の柚ゆずの木があつたのである。石が葉を分けて憂かつかつ々と崖へ当つた。ひとしきりすると闇のなかからは芳烈な柚の匂いが立ち騰のぼつて来た。

こうしたことは療養地の身を嘔むような孤独と切り離せるもの

ではない。あるときは岬の港町へゆく自動車に乗って、わざと薄暮の峠へ私自身を遺棄された。深い溪谷が闇のなかへ沈むのを見た。夜が更けて来るにしたがって黒い山々の尾根が古い地球の骨のように見えて来た。彼らは私のいるのも知らないで話し出した。「おい。いつまで俺達はこんなことをしていきやならないんだ」

私はその療養地の一本の闇の街道を今も新しい印象で思い出す。それは溪たにの下流にあった一軒の旅館から上流の私の旅館まで帰って来る道であった。溪に沿って道は少し上りになっている。三四町もあつたであらうか。その間にはごく稀にしか電燈がついていなかった。今でもその数が数えられるように思うくらいだ。最初の電燈は旅館から街道へ出たところにあつた。夏はそれに虫がた

くさん集まって来ていた。一匹の青<sup>あおがえる</sup>蛙がいつもそこにいた。電燈の真下の電柱にいつもぴったりと身をつけているのである。しばらく見ていると、その青蛙はきまったように後足を変なふう<sup>ふう</sup>に曲げて、背中を掻<sup>か</sup>く摸<sup>ま</sup>ねをした。電燈から落ちて来る小虫がひつつくのかも知れない。いかにも五月蠅<sup>うるさ</sup>そうにそれをやるのである。私はよくそれを眺めて立ち留<sup>とど</sup>っていた。いつも夜更<sup>ふ</sup>けでいかにも静かな眺めであった。

しばらく行くと橋がある。その上に立つて溪の上流の方を眺めると、黒ぐろとした山が空の正面に立ち塞<sup>ふさ</sup>がっていた。その中腹に一箇の電燈がついていて、その光がなんとなしに恐怖を呼び起こした。バアーンとシンバルを叩いたような感じである。私はそ



の橋を渡るたびに私の眼がいつもなんとなくそれを見るのを避けたがるのを感じていた。

下流の方を眺めると、溪が瀬をなして轟々と激していた。瀬の色は闇のなかでも白い。それはまた尻尾のように細くなつて下流の闇のなかへ消えてゆくのである。溪の岸には杉林のなかに炭焼小屋があつて、白い煙が切り立つた山の闇を匍い登つていた。その煙は時として街道の上へ重苦しく流れて来た。だから街道は日によつてはその樹脂臭い匂いや、また日によつては馬力の通つた昼間の匂いを残していたりするのだつた。

橋を渡ると道は溪に沿つてのぼつてゆく。左は溪の崖。右は山の崖。行手に白い電燈がついている。それはある旅館の裏門で、

それまでのまつすぐな道である。この闇のなかでは何も考えない。それは行手の白い電燈と道のほんのわずかの勾配のためである。これは肉体に課せられた仕事を意味している。目ざす白い電燈のところまでゆきつくと、いつも私は息切れがして往来の上で立ち留った。呼吸困難。これはじつとしていなければいけないのである。用事もないのに夜更けの道に立つてぼんやり畑を眺めているようなふうをしている。しばらくするとまた歩き出す。

街道はそこから右へ曲がっている。溪沿いに大きな椎の木がある。その木の闇はいたって巨大だ。その下に立つて見上げると、深い大きな洞窟どうくつのように見える。梟ふくろうの声がその奥おくにしていることがある。道の傍らには小さな字あざがあつて、そこから射して来る

光が、道の上に押し被<sup>かぶ</sup>さった竹藪<sup>たけやぶ</sup>を白く光らせている。竹というものは樹木のなかで最も光に感じやすい。山のなかの所どころに簇<sup>む</sup>れ立っている竹藪。彼らは闇のなかでもそのありかをほの白く光らせる。

そこを過ぎると道は切り立った崖を曲がって、突如ひろびろとした展望のなかへ出る。眼界というものがこうも人の心を変えてしまうものだろうか。そこへ来ると私はいつも今が今まで私の心を占めていた煮え切らない考えを振るい落としてしまったように感じるのだ。私の心には新しい決意が生まれて来る。秘<sup>ひそ</sup>やかな情熱が静かに私を満たして来る。

この闇の風景は単純な力強い構成を持っている。左手には溪の

向こうを夜空を劃くぎつて爬はちゆう虫の背のような尾根が蜿えん蜒えんと匍はつて  
いる。黒ぐろとした杉林がパノラマのように廻めぐつて私の行手を深  
い闇で包んでしまっている。その前景のなかへ、右手からも杉山  
が傾きかかる。この山に沿って街道がゆく。行手は如何いかんともする  
ことのできない闇である。この闇へ達するまでの距離は百米メートルあま  
りもあるうか。その途中にたった一軒だけ人家があつて、楓かえでのよ  
うな木が幻燈のように光を浴びている。大きな闇の風景のなかで  
ただそこだけがこんもり明るい。街道もその前では少し明るくな  
っている。しかし前方の闇はそのためになおいつそう暗くなり街  
道を呑のみ込んでしまう。

ある夜のこと、私は私の前を私と同じように提ちようちん灯ちんなしで歩

いてゆく一人の男があるのに気がついた。それは突然その家の前の明るみのなかへ姿を現わしたのだった。男は明るみを背にしてだんだん闇のなかへはいつて行ってしまった。私はそれを一種異様な感動を持って眺めていた。それは、あらわに言ってみれば、「自分もしばらくすればあの男のように闇のなかへ消えてゆくのだ。誰かがここに立って見ていればやはりあんなふうに消えてゆくのであろう」という感動なのであったが、消えてゆく男の姿はそんなにも感情的であった。

その家の前を過ぎると、道は溪たにに沿った杉林にさしかかる。右手は切り立った崖である。それが闇のなかである。なんとという暗い道だろう。そこは月夜でも暗い。歩くにしたがって暗さが増し

てゆく。不安が高まって来る。それがある極点にまで達しようとするとき、突如ごおつという音が足下から起こる。それは杉林の切れ目だ。ちようど真下に当る瀬の音がにわかにはその切れ目から押し寄せて来るのだ。その音は凄まじい。気持にはある混乱が起こつて来る。大工とか左官とかそういう連中が溪のなかで不思議な酒盛りをしていて、その高笑いがワツハツハ、ワツハツハときこえて来るような氣のすることがある。心が振ねじ切れそうになる。するとそのとたん、道の行手にパツと一箇の電燈が見える。闇はそこで終わつたのだ。

もうそこからは私の部屋は近い。電燈の見えるところが崖の曲り角で、そこを曲がればすぐ私の旅館だ。電燈を見ながらゆく道

は心易い。私は最後の安堵あんどとともにその道を歩いてゆく。しかし霧の夜がある。霧にかすんでしまつて電燈が遠くに見える。行つても行つてもそこまで行きつけないような不思議な気持になるのだ。いつもの安堵が消えてしまふ。遠い遠い気持になる。

闇の風景はいつ見ても変わらない。私はこの道を何度ということなく歩いた。いつも同じ空想を繰り返した。印象が心に刻みつけられてしまった。街道の闇、闇よりも濃い樹木の闇の姿はいつも私の眼に残っている。それを思い浮かべるたびに、私は今いる都会のどこへ行つても電燈の光の流れている夜を薄っ汚なく思わないではいられないのである。





# 青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「詩・現実」

1930（昭和5）年9月

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.utiya

校正：高橋美奈子

1999年1月11日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 闇の絵巻

梶井基次郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>